

タンチョウに襲いかかるヒグマの初記録

深津 恵太*

日にち

2012年9月14日

場所

北海道川上郡標茶町中チャンベツ原野（別寒辺牛湿原西側）の牧草地。北緯43度12分33.0秒、東経144度43分45.6秒。

観察記録

午前9時9分、筆者は上記牧草地より北に約500m離れた町道から、20倍の望遠鏡を使用して、タンチョウ *Grus japonensis* 成鳥2羽が牧草地で休息しているのを観察していた。すると、9時10分に突然近くの笹地からヒグマ *Ursus arctos* が飛び出し、タンチョウめがけて突進した。タンチョウ2羽は飛翔して逃げ何事も無かった。その後、ヒグマは牧草地を歩いて湿原方向へ移動したため、両種の接触は1度だけであった。

ヒグマは体の大きさからおそらく若い個体で、そ



写真1. タンチョウに逃げられた直後のヒグマ



写真2. 牧草地を歩く同個体のヒグマ

の行動からタンチョウに襲いかかろうとしたことは明らかであった。このタンチョウに襲いかかるヒグマの行動について、タンチョウやヒグマの調査・研究に携わっている方々にお尋ねしたところ、観察事例が他になかったため、一記録としてここに報告する。

考察

今回のようなタンチョウに襲いかかるヒグマの行動は他に記録がなく、偶発的であると思われる。しかし、観察地である標茶町や別寒辺牛湿原周辺において、タンチョウは多数生息している。一方、ヒグマについても目撃情報が多く、湿原や牧草地周辺は両種にとって、重複する生息地である。タンチョウとヒグマの接触は少なからずあるものと推察できる。

文献

タンチョウとヒグマの関わりについて調べてみると、記述されたものはアイヌの民話に少数あるのみであった。以下、3点紹介する。

- ① 更科源蔵のコタン生物記Ⅲ（1977年、法政大学出版局）にはタンチョウヅルの項目で以下のように記載されている。『釧路地方に鶴の舞（サロルン・リムセ）という優美な踊りがある。フン トリフン チカブ ハア ホー ハア ホー ホイ ホー という歌につれて、二羽のツルが翼をひろげたように着物の裾をかかぎって踊る。これはツルの恋の乱舞とも、飽食したときの喜びの舞ともいわれているが、この踊りは釧路地方では女性だけの踊りであり、これを踊っている間、男性は畏まり慎んでいなければならない。元来女性が着物の裾をまくるということは、悪魔祓いのオパラパラ（尻をバサバサさせる）以外にないことであるが、ツルとクマとは非常に仲が悪く、ツルがクマに立ち向かうときには両翼をひろげて、人間のオパラパラのような姿をするので（女がクマに襲われそうになると、着物の前をまくってオパラパラをする）、その真似を踊りにしたのではないかという見解をとる人もある。…以下省略』

*鳥類調査従事者 kei-f25@r7.dion.ne.jp

② 同じく更科源蔵が著したアイヌ伝説集・更科源蔵アイヌ関係著作集I (1981年、みやま書房)には、弟子屈町屈斜路・弟子カムイマ老伝として『丹頂鶴のことをアイヌはサロルンカムイ (湿地にいる神) といって、昔、手負い熊が湿原に逃げ込んで斃れるとき、鶴の長い首を下敷きにして死んでしまったので、下になった鶴が苦しさのあまり悲鳴をあげているのを人々が聞きつけ、集まって来て熊を発見したので、熊の居所を知らせた神さまとて祭り上げたというのである。』と記載されている。

③ また、吉田巖が著したアイヌ童話 (帯広市社会教育叢書第十巻、1965年、帯広市教育委員会)には鶴と熊との戦争と題して以下のように記載されている。『十勝国ケネといふアイヌの村から一里半ほどはなれてエツウレウケニタチという処があります。昔、お爺さんが一人で熊を捕りに行きました。ところが生憎悪い熊に出遭うと、かはいさうにも殺されました。誰いふとなく村の評判になりましたから、さあ大変、皆残念でたまらず、大勢して、ここを取り囲んで討取らうとしました。熊は叶はず、木のこんもりと小暗い樹林の中に逃げかくれました。

するとその樹の上には鶴の牡牝二羽が雛鶴をはぐくんで居ましたので「失敬な奴だ。よその領分に断りなしにおしかけて、狼藉を働くか。そこ動くな」と木の上から熊をねめつけ、鉾より鋭い嘴で以って散々につきかかりました。熊は屈意の隠処、やれ安心と一息ついたは命のすてどころ、夢中になって防ぎ戦ひましたが、とうとう要所要所をやられて斃れてしまひました。村人はそこで難なく仇をかへしてもらって今更のように鶴のおそろしい鳥であるといふことを感じないものはありませんでした。…以下省略』

文献考察

① では、アイヌの鶴の舞はツルがクマを追い払う踊りではないかという見解が紹介されている。筆者はタンチョウが天敵であるキツネやオジロワシに、翼を広げたまま走って追いかける行動を複数回目撃したことがあるが、それと同じような行動をヒグマに対しても行うのかもしれない。自然とともに暮らしたアイヌがその行動を目撃して、伝承していても不思議で

はない。

② では、タンチョウを「熊の居所を知らせた神さま」として記述している。熊が鶴の長い首を下敷きにしたとあるので、タンチョウを襲ったとも考えられないだろうか。若しくは湿原でヒグマに警戒したタンチョウの鳴き声を聞き、アイヌがヒグマを発見したのであろうか？

③ では、追い詰められたヒグマがタンチョウの営巣地に入り、嘴で突かれて斃されてしまう話である。タンチョウは樹上に営巣しないため、鷲の誤認も疑われる。

いずれの話もタンチョウとヒグマは仲が悪いことを伝えている。アイヌ民話と今回の記録の類似性はあると思われる。

まとめ

年々生息地を拡大しているタンチョウと、近年増えつつある人を恐れないヒグマが、共に人里に出没し、今回のような接触に至ったと思われる。今後も、両種の接触が各地で記録されると予想される。両種がどのような関わりがあるか、知見が蓄積されることを期待したい。

本報告を作成するにあたって、タンチョウとヒグマそれぞれの調査・研究者に、観察事例について確認させていただいた。アイヌの民話については、釧路市立図書館の司書の皆さまに調べていただいた。また、釧路市立博物館の貞國利夫学芸員には、原稿作成に適切なお助言をいただいた。

ここに皆様に心より感謝申し上げます。

近年タンチョウの個体数増加に伴い、本来の生息地である湿原から牧草地へ通年を通して活動範囲を広げてきたこと、ヒグマが冬眠に向けて餌を求め行動範囲が広がる季節であったため、両種の遭遇率が上がっていたことも観察出来た要因の一つと考えられる。ヒグマ本来の食性からみれば積極的にタンチョウを狙う理由は考えられないため、今回の記録は偶発的なものであると言える。しかし、ヒグマは野鳥を餌として狙っている事は知られているが、観察例は少ないため証拠を裏付ける貴重な記録である。

(貞國利夫)